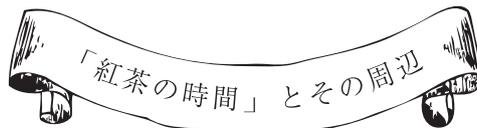


きもちは、 言葉を さがしている



第41話

水野 スウ

コロナ下の紅茶の時間

いつもと違う春を過ごして、いつもと違う夏を過ごす。季節がどんな表情をしていようと、確実に時は過ぎていく。それを切なく感じながら、今号は、コロナ下の紅茶の時間の日常と、その中で考えた、生で会うのとリモートは何が違うんだろう、という問いに対するささやかなリポートです。

「紅茶の時間」はコロナの緊急事態宣言下も今も、静かにお寺のように毎週開いています。一度閉めるといつ再開したらいいか判断に悩みそうだったのと、こんな場を必要とする人がもしか1人でもいるかもしれない、という2つの理由で、ずっと開けていました。

毎水曜日午後1時になると、紅茶が開いているとわかる看板をドアの外に出しに行きます。ドアには「外からいらしてご心配な方は、どうぞ洗面所で手を洗ってくださいね」に加えて、「本日、二人とも熱なし、だるさなし、元気です。ようこそ」と私た

ち夫婦の体調を記した紙も貼りだしてあります。

4月から5月にかけては、さすがに誰も来ない週が3回続きましたが、その後また少しずつ、ぽつりぽつりと誰かしら訪ねてきます。

本当に開いてるのね！行ってもいいのね？と、電話で念を押してから来る人。こんにちわあ、いいですかあ～、といいながら遠慮がちに入ってくる人。家にあがるなり、会いたかった会いたかった！と、何度もエアハグする人。開いててよかった、行けるところがあるってこんなにうれしいことなんだね！と部屋中見回しながら言う人。話したいこと山ほど溜まってるの！とダム決壊したみたいに一気に話します人。逆に、妙に口数が少ないから、ん？どうかした？と聞いたら、あまりにも長く人と会わないでいたら言葉がすぐには出てこなくなっちゃったの、という人もいます。

それぞれ反応は違えど、人に会う、ということにみんな、私も含めて、こんなにも飢えていたのか！と驚かされます。

石川県の緊急事態宣言が解かれた直後の6月はじめの日はたまたま、昔なじみの顔ぶれが遠くから近くからやってきて、何人かの時間がめずらしく紅茶で重なりあいました。

出かけるの久しぶり！あれ以来はじめて出たわ、と口々に言いながら、互いに離れて座って生身のからだをそこに置き、じかに顔をあわせて、数人で同じ時間をわかちあう。クーラーのない我が家で、開け放した窓から、一人ひとりの間を風が吹きわたっていく。これまでだったら当たり前すぎる、ただそれだけのことがとくべつ新鮮に思える紅茶の時間が流れました。

生で会えるってやっぱりいいねえ、Zoomの画面で会うのとはどっか違うね、という言葉が口々に。確かにそうだよね。顔を見て話せるという意味では同じなのに、どうしてだろう？ この問いはその後の紅茶で、何度も繰り返されることになりました。

紅茶にぼつぼつと人が来てくれるようになってあらためて、紅茶の時間って器だけあっても紅茶の時間じゃない、そこにひとが集い、顔あわせて語りあう、そういう中味があって初めて、紅茶の時間になるのだなあ、と実感しました。

とはいえ、毎週の紅茶に来る人数はコロナ前よりさらに少なくなったので、その分、相対する人との距離はゆったりと。そしてその間を埋めるかのように、これまでよりじっくりたっぷり、濃密な時間を過ごせるようになりました。場がにぎやかな時はついおろそかになりがちで、一人ひとりをていねいに聴く、受けとめる、という紅茶の^{かんじんかなめ}肝心要に、コロナのおかげで立ち戻れた、そんな気もするのです。目の前の人が何か話したいと思っているのなら、その人ができるだけ安心して、等身大の言葉を探しだせるよう、こちらは前よりいっそうゆっくり、その人が言葉を紡ぎだすのを待っています。

知りたい、というきもち

コロナで世間が騒がしくなるまでの3年半に渡って、紅茶では、毎週1時間を、その時々^のの社会や政治の話をしあう「草かふえ」にあてていました。2016年の参院選で改憲派の議席数が3分の2越えと

なり、これからは紅茶でもっと当たり前前に憲法や政治の話をしていかなくちゃ！という危機感からはじめたこと。この草かふえも、春以降は紅茶に来る人が減って開店休業状態が続いています。

そんな状態のある日の紅茶の時間、隣町に住むKさんが2ヶ月ぶりくらいにやってきて、座布団に座るなり「今ね、沖縄のこと、青い海と空だけじゃない沖縄のことが、すごく知りたいんです！」とすごい勢いで言いました。

Kさんは、小学生と中学生3人の子を持つ若いお母さん。今年はじめから紅茶によく来るようになって、とりわけ草かふえで社会を知ること、語りあうことを毎回とても楽しんでいるのを見ていてよくわかります。「私、本当に何にも知らなくて。気にはなっても知ろうとしてこなかったし、こういう話をほかの人とするってこともあんまりなかった」と正直にまっすぐ話すところが、なんともきもちのいいお母さんです。

そんな彼女がどうしてこのタイミングで沖縄のことを知りたくなったのかはわからなかったけど、彼女の勢いに応えるように、そこから話は一気に、沖縄戦のこと、米軍基地のことへ。

国内で唯一の地上戦があった沖縄。アメリカの爆撃で亡くなった人も大勢いたけど、日本軍に殺された沖縄の人たちもいた、スパイと疑われた人もいた、ガマの中で集団自決もあった。アメリカによる日本の占領が終わっても、その後20年、沖縄はずっと占領されたままだった。その間に日本国内の米軍基地が次々沖縄に移されていって、沖縄の占領が解かれた今もなお、その状態が続いていること、などなど。

え、どうして？ なんで！ それって何？ どういうこと？ Kさんからの質問ボールが次々飛んできて、話はあっち飛びこっち飛び。思っても見なかったところから彼女のボールが飛んでくるたび、ジャンプして懸命にボールを捕まえる私。取れないボールももちろんいっぱい。だけどそれもふくめて、このキャッチボールがなんと刺激的なことだろう。私たちの真剣なキャッチボールは小一時間も続きま

した。

Kさんは、知りたい、のかたまり。それってなんですてきなきもち！と私が胸を熱くさせていると、Kさんが目をキラキラさせてこう言いました。「ああ、やっぱり生でこうして話せるって、生でいろんなこと訊けるって、うれしい！」

知らないことは、恥ずかしいことじゃない。わからないことはすぐに訊く。どんな意見も否定されない。どれもみな、草かふえを始める時に、仲間たちと話しあって決めた「お約束」です。この日のキャッチボールは、その約束が実行されていることの証明みたい、と思えてなおさらうれしい私。何よりこの約束は、一人ひとりを個人として尊重し、認めることの13条を実践するための約束でもあったのだ、と感じます。

その日、何杯もお茶をおかわりしながらひさしぶりにゆっくり過ごしたKさんとの時間は、一期一会の至福のひとつ。紅茶という器があっても、そこに人がいないと紅茶の時間にならないと先に書いたけれど、この日はまさに、紅茶の器が言葉ときもちで満ちた豊かな時間でした。

「中抜き」の話

7月半ば。熊本で、大分で、また大雨による大変な被害が出ていました。そんな時に、Go to キャンペーンだなんて、とんでもない。そのお金を医療に、被災地にまわせばいいのに、というようなことをFacebookにかいたら、即、「そうすると中抜きができなくなっちゃうわけで」と皮肉たっぷりの、妙に説得力あるコメントをもらいました。う～む、確かにそうとも言える……ねえ。

その日がちょうど水曜日だったこともあって、紅茶に来たKさんがいの一歩に訊いてきました。「今日のFacebookに書いてあった、“中抜き”って何のこと？」

そこで話は、Go to キャンペーンの前に問題になった、持続化給付金のことに。コロナの影響で収入が減ってしまった事業者が国に申請して受け取ることのできる持続可給付金、その手続きを国に代わって行うのが、電通と関係のある社団法人。国の委託

を受けたこの事業を、電通にそのまま再委託して、さらに電通はそれを下請け、孫うけ、ひ孫うけ、というふうに分の関連会社におろしていく。そうやって委託先の子会社が多ければ多いほど、仲介した親会社の電通に中間手数料？がはいる仕組み。それを「中抜き」という言葉で呼ぶらしい。つまり、お金を必要とするところに直にお金が渡ってしまえば、その中抜きができない分、電通にしたら儲けが少なくなる、ということなんだろうね。

戦争プロパガンダのこと

電通って？というKさん。大きな広告代理店だよ、と答えると、え？なんで広告の会社がそんなことするの？とKさんから鋭いつっこみが入る。そうだよ、ごもつとも。この疑問に対しては、80年くらい過去にさかのぼって、戦争プロパガンダの話をしていられないわけにはいきません。プロパガンダというのは、政治的な意図をもった広報のこと。

テレビでCMを見たらついその商品を買いたくなることあるよね。宣伝の力をよくわかっていた戦前の政府は、広告業界の人たちとチームを組んで、「贅沢は敵だ」「1億火の玉」「壁に耳あり障子に目あり」などの、今でいうキャッチコピーをはじめ、ポスターやちらし、壁新聞を次々につくって、当時の人々のきもちをコントロールするのに、大きな力を発揮したんだって。お国の役に立ちたい、戦争に協力したいって、国民が率先して思うように。そこに関わっていた会社の一つが電通。

戦争が終わってからもこの会社は政府とかかわり、今や日本最大の広告代理店で、現在の与党政権としっかり手をつないでいる。つまり電通からすれば、政府は最大のお得意様、という特別な関係。だから、今回の給付金だけでなく、ほかの事業もいっぱい委託されてるんだよね。

それに電通はたくさんのビッグデータを持っていて、今も選挙の時にはそれを最大限に活かして与党を魅力的に宣伝することで、国民が誰に投票するかに大きな影響を与えている。

宣伝の影響力を考えて、お金持ち与党が有利になっちゃうはずいということ、選挙の時は宣伝にある程度の縛りがかかっている。だけど、憲法改正国民

投票の時には、なぜかその縛りがゆるいんだよ。ってことは、国民投票運動の期間中には、電通が制作したかっこいい改憲コマーシャルがばんばん流されるだろうってこと。そんなことも今のうちから意識していないと、つい宣伝に流されてしまいそうだよね。

中抜き、という一つのキーワードからはじまって、戦争の話が出てきたと思ったら、ラストで国民投票に着地、だなんてKさんのみならず、私までびっくりしたキャッチボールの顛末でしたよ。

あ、といっても、これはその日の紅茶のほんの一部。それ以上に、その日はそこに居合わせた人たちの、子ども時代の暮らしや家族の話、心にしみるKさんの兄弟の話、Kさんとは30歳くらい年齢差のある紅茶仲間の、本人もずっと忘れていた、親と幼かった自分の大事な一場面、などなどいっぱい聴かせてもらいました。

その時、その瞬間、知りたいこと、話したいこと、時には遠い日の思い出を、記憶の糸を手繰り寄せては語っていく。話す側、聴く側、どれだけ年齢が離れていても、そこに共通する家族の普遍を見つけて、共感するよろこびや悲しみ。この日の紅茶にも、一期一会のきもちと言葉が満ちていました。

差別はどこから

つい先日の紅茶ではKさんから、どうして沖縄は差別されているの？という、またまた直球ボールが投げられました。

琉球国の話からはじまり、独自の文化と歴史、中国との交流や貿易があったこと、薩摩藩が琉球を攻めたこと、日本によって沖縄県にさせられたこと、沖縄戦のこと、基地が今もたくさんあること、支配するものとされるものの関係、自分や自分たちの方が相手より上ですぐれていると思いたがる人間の心理、などなど、行ったり来たりたりの答えのないキャッチボールがこの日も長く続きました。

どうして差別は生まれるのだろうか、なぜ人は人を差別するのだろうか。なぜ人は人を支配したがるのだろうか。こういう問いに対するたった一つの正解はどこにもなくて、問われて考え、話しながら考え、聴

いてまた考える。差別について話している自分は、果たして誰も差別していないか？と問いの矢印は最終的に自分に向かってきます。

この日は大人たちの会話の横で、Kさんの2人の子どもたちがずっと遊んでいました。おとなたちの、差別をめぐる真剣な会話はきくと彼らの耳にも入っている。こんな時間もまた、一期一会の、得難い紅茶の時間です。

透過光と反射光

8月半ば、用事で金沢まで来たという能登のYさんが、その帰りに紅茶に寄ってくれました。輪島で子育て支援のリーダー的な役をしている彼女、コロナの影響で、大勢集まっていた親子活動が難しくなったけれど、それでも規模を小さくしてなんとか親子一緒に活動が生でできないものか、いろいろトライしているようです。そんなYさんと、話題はたちまち生とりモートのことになりました。

Yさんからこの日、「とうかこう」という言葉をはじめて聞きました。漢字で書くと、透過光。パソコンやテレビは、透過光で見えて、生でこうして会うその人のことは、反射光で見ている。透過光を通して見るのと反射光で見るとでは、どうやら脳の認識が違うらしい、という話です。

その話にとっても納得したのは、彼女も私も同様に感じていたことがあったから。パソコンで書いた原稿、何度も何度も読み返して、これでよし！と思って、それでも念のためにプリントアウトして読んでみると、同じ文章なのにどこか違和感があって、また手を入れて文章や語句を直すことになる。それって何故なんだろうといつも思っていたけど、なるほど、脳が違った認識をしている、ということだったのか。

Zoomに限らず、パソコンやスマホ画面で顔を見ながらリモートで話す、聞くことが、コロナの影響もあって最近は多くの人々の日常になってきました。遠くに住んでいて、今は会いに行けない親と子、祖父母と孫、病院に見舞いにいけない家族、恋人同士が、互いの表情を動画で見ながらリアルタイムで話

せるって、全然会えないより、声だけより、ずっとずっといいです。

私もそうやって誰かと話したり、複数の人と画面を共有しながら数時間話しあったりしています。打ち合わせに出かけなくていいし、めったに聞けない方の講演も家にいながらにして聞くことができ、なんてありがたいことかと思う。思うと同時に、生とリモートの違いや、そもそも人が人に会うってどういうことなんだろう、という問いが、ずっと私の中でぐるぐるまわり続けていたのです。

透過光の話を聞くと、リモートの相手と話すのと、生でじかに会って話すのとが、完全に同じじゃない、と感じていたこともやっぱり、と腑に落ちます。リモートのよさも必要性ももちろんあるし、これから先はもっとオンラインの使い方が発展していくでしょう。それであっても、生との違いはあるのだ、ということをも自分できちんと認識していきたいと思います。

生とリモート

Yさんと話しながら、ここ数ヶ月の紅茶で何度も繰り返された、生とリモートは何が、どこが、違うのだろう、という問いに対して、いろんな人がそのつど出してくれた言葉が思い返されました。

同じ場所にいる時って、パソコンの画面に映るその人だけに集中しているわけじゃなくて、全体で感じている、全体を受け取っている。話している人以外の人がいることも、その周りも、視野には入っている。

風が葉っぱを揺らす音や、鳥のさえずりも何気に共有しながら、誰かの話に耳を澄ましている。小さなうなずきも、首かしげの動作も、ことさら意識しては見えないけど、なんとなく見えている。

手ぶり身ぶりなど手の動き、変化する表情、しぐさ、声のトーンや態度。そういった身体的な言葉もあわせて感じている。その人の出してる熱量も、雰囲気も、感じとっている。言葉って、音だけで聞いているんじゃないんだ、もっといろんなものがからだの中には入ってきて、共振したり、共鳴したりしている。そういう場の中で反応する自分がある。

もしもその日、話したくなければ、ただ聴いてるってだけでいい。いや、何もしないでただそこに居て、いい。そこに居る、ということで、その場全体をつくる一人になっていると思うから、などなど。

最後に出てきた、「何もしないでただそこに居て、いい」という言葉が、いかにも紅茶らしいなあと思います。Zoomで自分の顔が画面に写っている時って、ただいる、というだけの態度はなかなかとりにくくて、積極的に参加しているように見えるよう、ちょっとかっこつけている自分にも気づきます。

紅茶にきた人が、風の吹き渡る空間で、緑の木々を視野にいれ、鳥の声、蝉の声を聴きながら、その人が今、話したいと心に沸いてきたことを言葉にして出していく。私は聴き、うなづきながら呼応して、こっちからもまた話し返す。その人が、今が今、話したいことを話しているな=放しているな、という時は、表情を見ているとわかります。どんどん表情が生き生きしてきて、その人が美しくなってくるから。この数ヶ月間、そういう美しい人を、人数は多くないけど割合的にはたくさん、毎週の紅茶で見てきた。それは私にとっても、一回きりのライブゆえの、幸せな瞬間です。ここにあげた言葉を聞かせてもらっている時の私も、まさにその瞬間を味わっていたのです。

言葉だけに依存しない

長年、ゴリラを研究しておられる京大総長の山極寿一さんがNHKの番組「コロナ新時代への提言」(*)の中で、こんなことをおっしゃっていました。

——我々は進化の過程で、信頼をつくるのに言葉だけに依存しなくなった。むしろ身体と身体が共鳴し合う中で信頼をかたちづけてきた。しかし今、からだの共鳴が失われて言葉だけでつながる社会に放り出された時、人間はいったいどうなるのか。

また、こうもおっしゃっています。

——言葉以前のコミュニケーションの手段である音楽は、人と人との間を共鳴させる一番いい装置。そういうものを多用して、情報社会であっても人と人が共鳴し合うようなことを。音の組み合わせである言葉で、意味を伝えるのではなく、きもちを伝える、そんなコミュニケーションを。

うん、うん、と深くうなづきました。確かに、音の組み合わせだけの言葉やからだに共鳴しない言葉では、心に響かない、信頼だって育めないと、私も常々思っていたからです。人は言葉だけでコミュニケーションしているのではないことを、山際さんの言葉から、あらためて突きつけられました。私自身、前々から「言葉だけ」で伝えられることなんて本当にごくわずかだよ、と人に言ってきたけれど、それでもいつのまに、言葉に過剰に依存しすぎていたかもしれない、と山際さんの言葉にどきんとしたのです。

はからずも今、コロナで前みたいに気軽に人に会えなくなった分、逆に、そもそも人と会って話すって、どういうことだろう、どんな意味があるんだろう、直接に会わない人と人の間で、私たちはどうやったら安心できる信頼関係を築いていけるのだろう、そういったことを考えること自体に、新たな意味があるようにも思えます。

これから先はますます、リモートで話す機会が増えていくでしょう。その必要性も、いいところも、勿論たくさんあります。だとしても、音の組み合わせだけの言葉には安易に頼るまい、とよくよく心していよう。リモートであっても、身体的な言葉や、共鳴しあうコミュニケーションの方法を、それぞれがどう工夫して発明していくか。それは互いの確かな信頼を培っていくのに、この先、もっと欠かせない努力になっていくのでしょうか。

五感トレーニング

また、こうも思います。リモートの会話ばかりずっとして、それがすっかり当たり前になったら、野生をふくめた五感というものが、どこか鈍くなってはしまわないだろうか。五感を働かせる、感性を磨く、という言葉があるように、足腰動かさないと

筋肉が衰えるという事実があるように、人間の五感だってしょっちゅう使っていないと、衰えて細ってしまうのじゃないかなあ。

筋トレならぬ、五感トレは、何気ない会話の中でもきっとできるし、自然の中の散歩中だってできること。誰かと話す中味は何でもいいのです。自分が本当に思っているきもちをもう少しすなおに言葉にしてみる。相手の目を見たり、うなづき返したり、手を叩いたり、口と耳だけでなく、からだを使って話してみよう、聴いてみよう。言葉で意味を伝えるのではなく、きもちを伝えるコミュニケーションを、もっともっと大事にしていこう。そうすることでからだとからが共鳴したり、響きあったりする会話がふえていくかもしれません。こんな五感トレーニング、コロナの時代の私たちにとって、この先ますます必要なことだと思えてならないのです。

*NHKBS1スペシャル「コロナ新時代への提言～変容する人間・社会・倫理」2020年5月23日放送